慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランス社会思想史概論文献数種
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.6 (1933. 6) ,p.841(59)- 845(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19330601-0059
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330601-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る事實である。

ハーヴァートの方法に據れば、謂はゞ、統計は無機的な取扱を受けてゐるに對し、折衷的方法は、一定の景氣理論を基礎として、統計的操作が規定せられるからして、統計が有機的に取扱はれてゐるといへるであらふ。本文に紹介した折衷的方法も、何等かの景氣理論を基礎としてゐることに於いて大體一致してゐるとしても、これが統計の實際的操作の上に如何に作用してゐるか、換言すれば、理論を如何に應用してゐるかに就いてはそれぞれ異つてゐる。一方に於いて短期に於ける經濟的變動を生せしめる原因に就いて、其の經濟的數量を需め、これに統計操作を加へて豫測の第一過程としてあるもの（レスキュール、ジンガー、〈ネー等）あるに對し、他方に直接にはかゝる原因關係を離れて、景氣徴候を最も明瞭に表明する數量を均衡理論上から抽出し來り、これに據つて、特狀景氣型を構成せしめる一手段とするもの（ワーゲマン）がある。前者に於いては變動理論が豫測論上主要なる地位を占め、後者に於ては寧ろ統計が主要なる地位に置れてゐる。而して、孰れが正鵠を得てゐるか、其の得失は如何の問題は豫測論に於ける統計應用の限界の角視せらして新しく吟味せられることを要する。唯茲に看過し得ない一事は、後者に於ては勿論前者の中にも、景氣徴候型の統計的構成を重視するの傾向が存在してゐることである。徴候型の構成は、豫測の結果に對して數量的時間的規定を要求することが大となればなるに從つて愈其の必要が增大し來ることは明であると謂へやふ。乍併、かゝる傾向は往々にして結局ハーヴァードのそれの如き機械的方法への複歸を生ぜしむるに至ることは想到するに難くはない。即ちかゝる徴候型構成に拘泥する限り、生長的發展や經濟的發達と景氣變動との相互依存關係は沒却せられ、變動型が固定的性質を帶びて來る結果、現在の豫測資料たる經濟的數量は、發達的要素から離れて、これ等の定型に機械的に鑄入せられる危險を有するのである。（昭和八・五・一九）

フランス社會思想史概論文献數種

永田清

フランス社會思想想史全般に亘る著書は、獨乙に於ける獨乙文献の如く、豐富ではない。この事は、一部、概論書を好まざるフランス人の性癖にもよるのであらう。無論個々の部門に關する好著は多い。例へば、十八世紀フランス社會思想に關しては、

A. Lichtenberger: Le socialisme au XVIII^e siècle (Étude sur les idées socialistes dans les écrivans français du XVIII^e siècle avant la révolution) 1895

A. Espinas: La philosophie sociale du XVIII^e siècle et la révolution. 1898.

A. Lichtenberger: Le socialisme et la révolution française (Étude sur les idées socialistes en France de 1789-1796) 1899.

フイジオクラアトに就ては、

G. Weulersse: Le mouvement physiocratique en France (de 1756 à 1770) 1910.

A. Dubois: Précis de l'histoire des doctrines économiques dans leurs rapports avec les faits et avec les institutions. Tome I (續刊現れず) Époque autérieure aux physiocrates. 1903.

フランス革命とバブーフ運動に於ては、

J. Jaurès: Histoire socialiste de la Révolution française. 1923-24.

Advielle: Histoire de Gracchus Babeuf et du Babouvisme. 1884.

Buonarroti: Histoire de la conspiration pour l'égarité dite de Babeuf. 1869.

サンシモニスム、フウリエリスム、プルドニスムにとつては、

H. R. d'Allemagne: Les Saint-Simoniens, 1827-37. 1930.

J. Charléty: Essai sur l'histoire du Saint-Simonisme. 2 éd., 1930.

G. Weill: Saint-Simon et son œuvre (un précurseur du socialisme) 1894.

H. Bourgin: Fourier (Contribution à l'étude du socialisme français) 1905.

P. Desjardins: P.-J. Proudhon. 1896.

A. Berthod: P.-J. Proudhon et la propriété. 1910.

十九世紀前半のフランス社會思想史としては、

G. Isamert: Les idées socialistes en France (de 1815 à 1848), le socialisme fondé sur la fraternité et l'union des classes. 1905.

又、一八七〇年以後より現在に至る迄の經濟學說史として、

G. Pirou: Les doctrines économiques en France depuis 1870. 1925.

がある。此等の著書は各個部門の研究として看過出來ぬものと謂くるであらう。素より、一國思想の本質的研究は、其本源的文献に依るか、少くとも、個々思想の研究文献に據らねばならぬこと無論である。併し乍ら、徒らに、何等の豫備知識なくして直に本源的資料の研究に進むことは、勞多くして收穫が少い。この意味で、思想史全般に亘る概論書の存在が必要となつて來るのである。然らば、斯る意味のフランス社會思想史概說文献には如何なるものがあるか。

其數種を擧ぐれば、

H. Michel—L'idée de l'État, Essai critique sur l'histoire des théories sociales et politiques en France depuis la révolution. 3 éd. 1898.

この書の特徴は、國家と個人主義の理念を中心として思想の發展を說く點に在る。即ちミシェルは、序論に於て、フランス革命に至る迄の十八世紀哲學者及び個人主義者の理論と運動とを述べ、續いて、一篇二篇に於て、個人主義原理に對する政治的及び社會經濟的反動を擧げた。サン・シモン及びサン・シモン主義者、ビュシェ、ピエール・ルルウ、ルイ・ブラン、ベッケェル、ヴィダル、シスモンディ、ブランキ、ビュレェ等の思想運動は斯る反動として解釋されて居る。三篇は、十九世紀個人主義者の提題の說明であつて、デティュ・ド・トラシー其他による十八世紀より十九世紀への個人主義の轉化、ロワイェ・コラアル、ギゾーの自由主義、トックヴィル、ラマルティンの民主主義、セェ、ロッシイ、デュヌワイェ、バスティアの正統派經濟學說が說かれる。茲で最も注意を惹くのは、ミシェルが、フウリェ、プルドン主義を個人主義のパラドックスとして說明する點である。彼は謂ふ——「フウリェ、プルドンは個人主義を其結論と對立せしめる。併し乍ら「ファランステェル」と「アナルシイ」は正しき意味に於て此原理の論理的適用にすぎないのである」(前掲書三七五頁)と。フウリェ、プルドンを社會主義者とするか、個人主

義者とするかには異論がある。其は結局社會主義、個人主義なる名辭の意義を如何に解釋するかによつて決せらるべきであらう。フウリエ、プルドン共に、私有制度の無條件廢止論者ではない。從つて、私有制度の廢止を標準として前二主義を區別すれば、此二者は個人主義者中に這入るのである。ミシエルが、この二人を評して、「彼等は經濟學者（正統派）及び社會主義者の開き且つ測定した角度から問題を見た」（四一六頁）と謂つて居るのは、二者理論の精細なる分析者として最も率直なる解釋であらう。四篇に於てコント其他社會學者の社會思想（コントと經濟學に就ては、Roger Mauduit, Auguste Comte et la science économique. 1929—拙稿三田學會雜誌二十四卷一號參照）が述べられ、五篇で、十九世紀末の思想狀態が一つの混亂期として說明されて居る。この書が、Dubois, Advielle の前揭書及び Juglar の Crises commerciales と等しき程度に於て入手困難なのは遺憾である。

C. Brouilhet—Le conflit des doctrines dans l'économie politique contemporaine. 1910.

此書はミシエルの前揭書に比較すると說明の內容も稍〻粗雜であるが、二十世紀初頭に於けるサンデイカリスム及び勞働組合の經濟理論にまで及んで居ることは便宜である。フランスに於ては、其思想史を述べる場合、自由主義學派、社會主義學派、中間學派に分つて、各、其發展の過程を說明するのが普通である。例へば、前述のピルウの如きも其れであり、ベショウも亦、二十世紀の經濟學派を分つて、フランス經濟學派、個人主義學派及び國家社會主義、社會主義學派として居る。ブルイエもこれに類する。

即ち彼れは一篇に於て自由主義學派を論じ、フイジオクラアト及び其自然的秩序の理論と其後の發展を述べて居る。二篇では、中間學派として、干涉主義及びソリダリテ學派と社會的急進主義が問題とされる。三篇に於て、社會主義を論ずるが、この場合、社會主義者の理論を三個に分つて、（一）宗教若しくは期待社會主義（le socialisme messianiste ou expectif）、（二）暴力社會主義、（三）法的社會主義として居る。（二）がサンディカリスムと結び付くことは無論であるが、フランス社會思想史としては、サンディカリスム自體の說明に相當の紙數を費す必要がある。故に彼れは、特に一篇を設けて、サンディカリスム及び勞働組合の經濟理論を說いた。

この書の特徵は、思想の發展を多く說かずして著者自身の立場よりする經濟理論的批判に努力して居る點である。思想史全體を展望せんとするものにとつては、其は却つて大なる障礙であらう。

C. Bouglé—Socialisme français, 1932.

ブグレの近著「フランス社會主義」は、其主題が社會主義史のみに限らるゝだけに、叙述の態樣も整然たるものがある。十九世紀前半はフランス社會思想史上最も收穫の多かつた時代である。サン・シモン、フウリエ、續いてプルドンの出現は、殊に此等改革者（Reybaud）の基本理論が各〻異るだけに、研究の興味を惹くことが甚しい。ブグレの該書はこの點に關して敎ふところ極めて大である。即ちサン・シモニアンと產業主義、フウリエリスムと消費組合運動、プルドンとサンデイカリスムと謂ふ連繫はブグレに依て可成り明瞭に描出されて居る。即ち彼れは、十八世紀の哲學者及び「經濟學者」並にフランス大革命の遺產を調べた後、サン・シモニスム、フウリエリスム及びプルドニスムに就き、其發生當時と現在との比較による決算書を作成した。思想史上の收穫を現實の理論と運動とに結び付ける試みは、この書に於て、充分の成功を收めて居るのである。